

片足が^{はま}嵌った方への中級編

初級編を体験すると^{まかり}罷り成りにも自分が作った一本の小柄が手に入るので、それで大半の方は満足できるかもしれない。しかし「鍛冶」に食指が動いた人はどうしても^{ふいご}鞆を操ってみたいくもあるだろう。本格的な^{ふいご}鞆の扱いを体験できるのは中級になる。初級で用意されていた「鋼の板」の一段手前の「火作り」という工程から始め、焼き入れが終了した後の「^{なかご}茎仕立て」という工程を行うことになる。

火作りとは、素延べという段階(上級で詳述)まで終わっている鋼材を元に、ある程度形作られた鋼を熱し、鉄鎚で叩きながら刀らしい形にする作業である。横座という鍛冶仕事を行うメインの位置に座り作業する。つまりは本来何年もの修行の末に座れる場所なのだ。かなり嬉しい体験が出来ることになる。

^{ほど}火床(火を起こして鋼を暖める場所)に炭火を起こして^{ふいご}鞆を吹いて火力を上げ全体に火が回ると作業が始まる。

刀匠から一連の工程を教えて頂き「ではどうぞ」と横座を空けてくれる。さて今言われた作業を踏襲すれば良いはずなのだが、何をすれば良いのか？緊張と不安で舞い上がり、さっぱり分からなくなるのは当然の成り行き。刀匠から再度手取り丁寧に説明を受けながらゆっくりと作業を進めよう。

^{かなしき}鉄敷(素材を金槌で叩く時に受ける台)に熱く焼いた鋼材を起き、金槌を振り

下ろしながら^{つか}小柄の形に整形していく。^{ふいご}鞆を吹き、鋼材を暖め、冷めない

ちに整形していくという作業は結構重労働で、まず^{ふいご}鞆吹きが苦勞する。小気

味良く一定の圧力で^{ほど}火床に風が送り込まれれば、温度はグングン上昇するのだが、安定しないとなかなか温度が上がらないで、それに炭はどんどん燃えてし

まう。慣れた者が使う量の倍は使うであろうから、その分体力も必要となってしまうので、それは覚悟してもらわねばなるまい。

なんとか鋼を目的の温度まで上げて、^{かなしき}鉄敷に置いて叩き始めても、振り下ろす

角度や強さが上手くなければ意図した通りに鋼は整形できない。それに^{かなしき}鉄敷に

置いた時点で、熱した鋼と^{かなしき}鉄敷との温度差、金槌との温度差で触れているだけ

で、せっかく暖めた鋼材の温度が下がってしまい、整形できなくなってしまう。ここでも迅速さが要求される。

焼入れでもそうであったが、鍛冶仕事は高温での作業が付きまとうので、迅速に作業を進めなければならない個所が随所にある。刀匠の仕事をしっかり見て事前に練習をして作業にあたった方が良い。

そして火作りが終了すると初級での作業に向かう。

「あーなるほど、初級で渡された『鋼の板』はこうして作られるのか」

刀匠の手業によるものと、自分が作ったモノとのギャップに驚きを感じるかもしれない。ヘンチクリンな火作り鋼板を見て納得する瞬間でもある。

そして焼き入れが終わり、^{なかご}茎仕立ての作業を行う。^{なかご}茎と云うのは^{つか}柄（刀の手

で握る部分）の内部に入る部分である。刀身の流れや向きを見ながら鑢を掛け、ゆがみを直し、全体のバランスを整えていくと、綺麗な小柄が出来上がる。鞘

に収められた小柄はそれはそれで美しくもあるが、^{なかご}茎を見ても全体の balan

スが良いと嬉しくなる。^{なかご}茎の部分は形さえ整っていれば良いと感じる人もい

るかもしれない。しかし全体を見渡した時の美しさや、隠れる所への気配りなどに拘るのも日本刀の世界である。見えないところにまで気を配るといのは上品で粋である。

^{なかご}茎仕立てが終わると砥ぎと鞘で、工程としては初級と同じになる。

了